ビハーラの定義と医療福祉機関におけるビハーラ活動の大切な姿勢

鍋島直樹

序

本論では、先行研究におけるビハーラの定義を紹介し、ビハーラの原点とその展開を踏まえて、ビハーラの定義を再確認する。次に、仏教・浄土教を依りどころとする医療福祉機関におけるビハーラ活動の実際を当該施設の専門職の臨床経験と姿勢に学び、参与観察を通してビハーラ活動における大切な姿勢を明らかにしたい。(1) 現場スタッフの努力に学び、一人ひとりのいのちにどう向き合うかについて問い直すためである。

一　ビハーラの定義

1　谷山洋三におけるビハーラの定義

ビハーラに関連する施設や活動を調査し、ビハーラの定義をした先行研究に、谷山洋三「ビハーラとは何か？　応用仏教学の視点から」の成果がある。その成果論文によると、ビハーラを、狭義、広義、最広義にわけて定義している。(2)

狭義……仏教を基盤とした終末期医療およびその施設

広義……老病死を対象とした医療および社会福祉領域での活動及びその施設

最広義…災害援助、青少年育成、文化事業など「いのち」を支える、また「いのち」を考える、仏教者を主体とした社会活動

このビハーラの定義は、谷山自身が長岡西病院のビハーラ僧として勤務し、ビハーラの実態を把握し、かつインターネット検索によるビハー

ラの用例も調査して整理したものであり、宗教者や医療者の間で広く活用されている。[3]

2　田宮仁・中村元におけるビハーラの定義と四つの柱

一九八五年、田宮仁は、キリスト教のホスピス・ケアに学び、「仏教を背景としたターミナルケア（終末期医療）施設」の呼称として「ビハーラ」を提唱した。[4] ビハーラの原意とは何か。田宮仁は、一九八六年一月一日、「仏教を背景としたホスピス／ビハーラ（Vihāra）の開設を願って」（ライフサイエンス十三巻一号）の論文で、初めてビハーラの原意と構想を発表した。[5]

> ビハーラ Vihāra…散歩して気晴らしをすること。休息の場所。仏教徒の僧院または寺院。（『漢訳対照梵和大辞典』、荻原雲来編、一二六〇頁より抄出）

また、中村元の「ビハーラ活動の源流」によると、[6]

> 「ヴィハーラ vihāra）」とは、インド一般では「くつろぐこと」あるいは「くつろいでとどまること」を意味する場合が非常に多い。…中略…漢訳仏典の用法についてみると、ヴィハーラの動詞形である「ヴィハラティ」は「住」という漢字で訳されている。そこで名詞のヴィハーラは安住、安らかな落ち着きを意味することとなった。
>
> このように「ビハーラ」は「くつろいでとどまること」「精舎・僧院」「休息の場所」を指す言葉である。田宮は、「釈尊在世時より祇園精舎の古地図に無常院の名を冠した一画のあることを付記しておきたい。[7]」と先の論文に記している。実際に、仏教の「精舎・僧院」には「病舎」があり、「祇園精舎」は梵語では Jetavana-vihāra と呼ばれる。

実はもともと、田宮仁も、ビハーラの呼称を「仏教を背景とした終末期医療施設」に限定していない。田宮は、ビハーラの具体的構想について、次の四つの柱を掲げているからである。

（1）臨床の場としての「ビハーラ」の開設
（2）その「ビハーラ」におけるビハーラ・ケア論の開拓について
（3）「ビハーラ」のスタッフ養成、及びそのシステム作り

（4）ソーシャル・アクションとしての「ビハーラ運動」の展開[8]

したがって、田宮においてこれらの四つの柱がすべてビハーラの具体的活動であると理解しておく必要があるだろう。すなわち、ビハーラとは、(1)ビハーラ施設、(2)ビハーラ論研究、(3)ビハーラ施設のスタッフ養成教育、(4)社会活動としてのビハーラ運動の総体である。

3　浄土真宗本願寺派ビハーラ活動の理念と実践

浄土真宗本願寺派社会部では、田宮仁が提唱したビハーラの理念を大切に受けとり、一九八六年にビハーラ活動研究会を発足し、一九八七年、ビハーラ活動者養成研修を始めた。その養成研修は、僧侶、門信徒、医療・社会福祉施設専門職が応募して研修生となり、ホスピスやビハーラ活動に関する医療福祉の基礎知識の学習、リクリエーションの方法、仏教・浄土教の人間理解、浄土真宗の死生観、救済観について、座学と実習を組み合わせて学ぶ。二〇一六年までで一二五一名の養成研修修了者を輩出した。ビハーラ活動養成研修修了者は、全国各地のビハーラ活動に協力する。修了者のなかには、病院・社会福祉施設の常駐僧侶、ビハーラ僧もいる。二〇一七年から、あそかビハーラ病院やビハーラ本願寺などの医療福祉機関で、専門職とチームを組んで患者や利用者のケアにあたる専門僧侶を養成するために、ビハーラ僧養成研修が始まった。

浄土真宗本願寺派『ビハーラ活動の理念と方向性』は、筆者が委員長として有識者の意見をまとめて成文化した[9]。まず、そのビハーラ活動の理念と方向性を抜粋すると次の通りである。

ビハーラ活動の理念

「ビハーラ活動」とは、仏教徒が、仏教・医療・福祉のチームワークによって、支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に共感し、少しでもその苦悩を和らげようとする活動です。そして私たち自身が、苦しみや悲しみを縁として、自らの人生の意味をふりかえり、死を超えた心のつながりを育んでいくことを願いとしています。すなわち、「ビハーラ活動」とは、「生・老・病・死」の苦しみや悲しみを抱えた人々を全人的に支援するケアであり、「願われたいのち」の尊さに気づかされた人たちが集う共同体を意味します。

ビハーラ活動の方向性

（1）広く社会の苦悩にかかわるビハーラ、（2）自発的にかかわるビハーラ、（3）相手の心に聴くビハーラ、（4）医療・福祉と共にあるビハーラ、（5）深くいのちを見つめるビハーラ、という五つの方向性を掲げる。

『ビハーラ活動の理念と方向性』の終わりにこう記されている。

仏教においては、一人ひとりはかけがえのない大切な仏の子であり、一つひとつの存在が無限の意味と尊厳さをもって輝いていると教えています。私たちは、このみ仏の智慧と慈悲にいだかれて、さまざまな執着や偏見をとりはらい、相手の幸せを本当に願い、相手の痛みをともに痛んでいくという心をもって、いのちの諸問題に応えていきます。

ここに明らかなように、ビハーラ活動とは、医療・社会福祉・仏教の専門職がチームを組んで、患者がどのような状態にあるのかを理解し、患者の全人的な痛みを和らげ、家族とも相談しながら、患者が最後までその人らしく生きられるように援助する活動であり、患者だけでなく、子ども、高齢者、障がい者、被災者などの苦悩や悲嘆に向き合い、支援しつづけるのがビハーラ活動である。そのビハーラ活動の基盤に仏教があり、如来の智慧と慈悲にいだかれて、偏見や差別がとりはらわれ、一人ひとりを仏の子のように尊重する。生きとし生けるものすべてが仏に願われたいのちであることを知って、一人ひとりがその人らしく人生を生きられるように向き合い、支援する活動であるといえるだろう。

4　打本弘祐におけるビハーラの分類

また、打本弘祐は、あそかビハーラクリニック緩和ケアなどでのビハーラ僧として勤務し、ビハーラ活動の展開をふまえて、ビハーラを次の二つに整理している[10]。

（1）　超宗派型ビハーラ…長岡西病院ビハーラ病棟、ビハーラ秋田、ビハーラ医療団、福岡聖恵病院聖恵ビハーラ（緩和ケア病棟）、一般社団法人ビハーラ21など

（2）　教団主導型ビハーラ…浄土真宗本願寺派のビハーラ活動、日蓮宗ビハーラネットワーク、立正佼成会附属佼成病院など

すなわち、超宗派協力型ビハーラと教団主導型ビハーラという分類である。しかも、打本は、これら二つのビハーラ活動について、次のように意義づける。

ビハーラ活動の展開は、田宮が打ち出した超宗派の仏教僧侶による活動によるものではなく、伝統教団が既存のままでは宗教的生命力を失いかねない危機感を持って現代社会の諸問題に取り組んできたことの一つの成果が、ビハーラ活動の幅広い展開に寄与していると筆者は考えている。[11]

現在のビハーラ活動は「超宗派型ビハーラ」と「教団主導型ビハーラ」の二つが、それぞれに活動を展開していると捉えられるのである。なかでも浄土真宗本願寺派によるビハーラ活動は、結果としてビハーラを終末期医療から医療・高齢者福祉へ展開させ、僧侶のみならず門信徒と共に行う活動へと発展した。[12]

この視点は重要である。なぜなら、打本はビハーラ活動を「超宗派型ビハーラ」と「教団主導型ビハーラ」に分類しながらも、双方共にビハーラ活動の進展形として意義づけるものであり、多様に展開するビハーラ活動すべてを意義あるものとして認めているからである。

5　ビハーラの原意と定義―四つの領域

もう一度、ビハーラの原点にかえり、ビハーラ活動がどのように展開してきたかをふりかえってみたい。

ビハーラとは、「くつろいでとどまること」「休息の場所・気晴らしをすること」「精舎・僧院」「身心の安らぎ」を原意とする。祇園精舎の無常院を淵源とし、一九八五（昭和六〇）年、田宮仁は「仏教を背景とした終末期医療施設」としてビハーラを提唱した。その提唱に共鳴して、浄土真宗本願寺派では、ビハーラ活動を、病院、社会福祉施設、災害地などで人々の苦悩に向き合って支援する活動として意義づけ、一九八七（昭和六二）年からビハーラ活動者の養成教育を行ってきた。また、佛教大学、龍谷大学、同朋大学、淑徳大学、大正大学、四天王寺大学などの大学でも、ビハーラ活動に関する教育と研究を推進している。この歴史をふまえると、ビハーラは次の四つの柱からなる意味をもっている。

第一に、ビハーラとは、仏教を背景として設立された緩和ケア病棟や社会福祉施設およびそのケアをさす。ビハーラ活動とは、医療・社会福祉・仏教の専門職がチームを組んで、患者や高齢者、障がい者がどのような状態にあるのかを理解し、苦悩を抱えた人の全人的苦痛を和らげ、家族とも相談しながら、一人ひとりが最後までその人らしく生きられるように援助する活動である。

第二に、ビハーラ活動とは、医療福祉機関においてビハーラ活動に携わる専門職やボランティアの人材養成教育である。一人ひとりのいのち

の尊厳を護る生命倫理教育、仏教を背景とする死生観教育、スピリチュアルケアやグリーフケア教育を医師、看護師、介護士、栄養士らの医療福祉スタッフと僧侶や宗教学者とが協力して実施し、後継者を養成する。このビハーラ活動者養成教育は、医療福祉の「看取り」と仏教の「救い」を統合した教育である。

第三に、ビハーラ活動とは、医療・社会福祉の知見と仏教の知見とを融合し、患者や利用者の全人的な支援を行うための学際的な研究である。ホスピス・緩和ケア研究、ビハーラ活動論研究、スピリチュアルケア研究、グリーフケア研究、仏教社会福祉研究などがある。

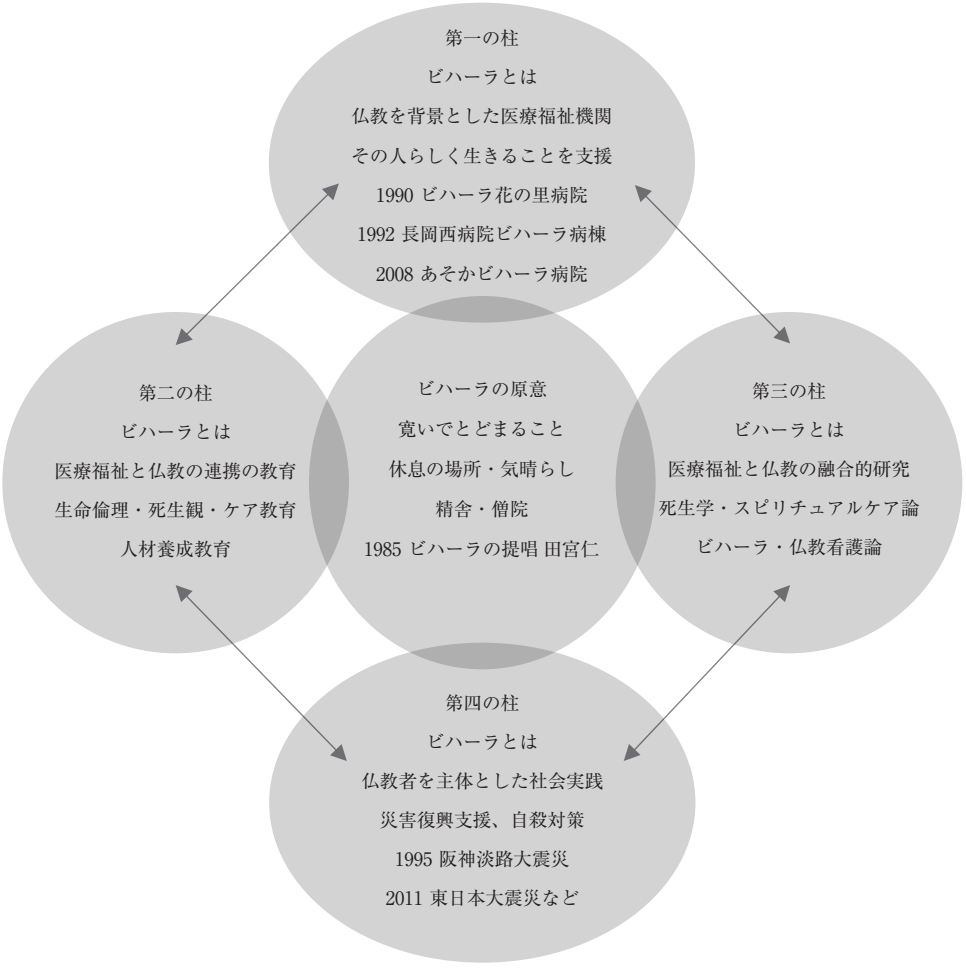
第四に、ビハーラ活動とは、広く社会の苦悩と悲嘆に寄り添う仏教者を主体とする社会実践である。「広く社会の苦悩にかかわるビハーラ」というという浄土真宗本願寺派ビハーラ活動の方向性が示しているように、ビハーラ活動は、医療福祉機関における活動にとどまらず、広く世界の苦悩に向き合い、災害復興支援や自殺対策支援としても展開してきた。一九九五（平成七）年の阪神・淡路大震災、二〇〇四（平成一六）年の新潟県中越地震、二〇〇七（平成一九）年の新潟中越沖地震、二〇一一（平成二三）年の東日本大震災、二〇一六（平成二八）年の熊本地震、二〇一八（平成三〇）年の西日本豪雨災害などの災害時に、普段からビハーラ活動をしている僧侶や門信徒が共に力を合わせ、「御同朋」として被災者の復興支援に携わった。僧侶は、被災者の求めに応じて、災害地などで追悼法要をおこない、遺族の悲しみに耳を傾けつづけた。さらに、一九九八（平成一〇）年、日本における自殺者数が三万二八六三人となって急激に増えたことを憂慮し、ビハーラ活動者の中から、自殺予防や自死遺族支援に積極的に参加する仏教徒も生まれた。このようにビハーラ活動は、僧侶が布袍を脱ぎ、門信徒が青年会、婦人会、壮年会という枠を超えて、専門職と協力して、病院、デイサービスセンター、特別養護老人ホーム、障がい者福祉施設、児童養護施設などの医療福祉施設、寺院、被災地で、人々の悲しみに寄り添う活動である。寺院での子ども食堂、死を語りあうデスカフェなどもある。

ビハーラ活動はこれら四つの柱が支え合って展開している。ビハーラの原点と活動の展開を尊重すると、ビハーラ活動は、次のように定義できる。

ビハーラ活動の定義

ビハーラ活動とは、仏の慈悲に照らされたぬくもりと、生かされているおかげさまの心で、支援を求めている人々を孤独のなかに置き去りにしないように、その心の不安に耳を傾け、少しでもその苦悩を和らげようとする活動である。そして、相手も自分自身も、苦しみや悲しみを縁

として、自らの人生の意味をふりかえり、死を超えた心のつながりを育んでいくことを願いとしている。「ビハーラ活動」とは、「生・老・病・死」の苦しみや悲しみを抱えた人々を全人的に支援するケア、医療福祉施設、教育、研究、社会活動であり、「願われたいのち」の尊さに気づかされた人たちが集う共同体である。



二　ビハーラ関連施設の理念と実践

ここで、ビハーラ活動を展開している医療福祉機関の理念と実践の特質を明らかにしたい。以下の成果は、実際に、ビハーラ関連の医療福祉機関での臨床研修と参与観察を通して、医療福祉機関の専門職の臨床経験に学んで見出されたものである。

1　長岡西病院ビハーラ病棟の理念と実践―ビハーラ僧と仏堂の役割

田宮仁が提唱したビハーラ、すなわち、「仏教を背景とした終末期医療施設」の第一号は、一九九二年に設立された新潟県長岡市の長岡西病院ビハーラ病棟（開設当時二二床）である。田宮仁は、そのビハーラ病棟の設立理念を次のように説明している。(13)

（1）限りある生命の、その限りの短さを知らされた人が、静かに自身を見つめ、また見守られる場である。

（2）利用者本人の願いを軸に看とりと医療が行われる場である。そのために十分な医療行為が可能な医療機関に直結している必要がある。

（3）願われた生命の尊さに気付かされた人が集う仏教を基礎とした小さな共同体である。（ただし利用者本人やその家族がいかなる信仰を持たれていても自由である）

ここで重要なことは、ビハーラ病棟は、医療と仏教とが連携して患者とその家族を支える場であるという点である。すなわち、終末期医療施設としてのビハーラ病棟は、医療行為を中止して、安らかに死ぬことをめざすのではない。患者は医療を受けて、静かに人生をふりかえることができ、家族や医療スタッフに見守られて生きる場である。このビハーラの理念には、誰もが抱える「生・老・病・死」の苦悩について、医療や社会福祉と共に、仏教徒も責任をもって応えていきたいという願いがこめられている。

長岡西病院ビハーラ病棟には仏堂があり、宗派を超えて僧侶が協力し、ビハーラ僧は勤行と法話を行い、患者や病棟スタッフの気持ちを傾聴している。田宮仁はビハーラ僧の姿勢を「仏教者屑籠論」として説明した。(14) 田宮仁はビハーラ僧の役割について、こう説明している。(15)

自分に何らかのカがあって相手に何かをしてあげるというのではなく、相手が「その人らしく」存在することを護り念ずるということであり、看護の「護」に他ならない。…中略…かつて看病比丘という存在があったが、ビハーラ僧は自身の存在を主張する必要はなく、部屋

の片隅に置かれた屑籠のような存在であることを期待している。辛いこと、汚いことが、何でも放り込まれ、そのことにより部屋が片付くように、人の心が整理され方向付けられたらよいのである。

あたかも部屋に屑籠があると、さっとゴミが捨てられてきれいに片付くように、病棟にいるビハーラ僧は、患者の苦悩や希望に耳を傾け、それぞれのかけがえのない物語を大切に受けとめる。患者が言うに言えない気持ちを打ち明け、話したいことを話せるように、ビハーラ僧が心の屑籠のように患者の近くにいるということである。

長岡西病院ビハーラ病棟のビハーラ僧は、仏教各宗派を超えて協力して活動する。設立以来、木曽隆、谷山洋三、森田敬史らがビハーラ僧を務めた。森田敬史は、二〇〇七年から新潟県長岡西病院のビハーラ僧に就任し、緩和ケア医療チームの一員として二〇一七年まで、患者・家族の心のケアに携わった。森田は、「ビハーラ僧の実際」の論文で、緩和ケアにおけるビハーラ僧の役割について、田宮仁が提唱した仏教者屑籠論に基づき、参与観察を通して考察している。森田敬史は、ビハーラ僧の役割について、

患者が吐き出す不安や恐怖、悩みなどを全て受け入れる〝クズカゴ〟のごとく、患者の話を聞き、それにより患者自身が自分の心を整理しやすくなるように、お手伝いをすることである。…中略…クズカゴは部屋の片隅にあるもので、部屋の真ん中に置かれることは少ない。…中略…その存在を主張することなく、心の蟠り、もやもや感、悩みに至るまで諸々の感情を吐き出してもらいやすい立場をとるということである。ここで、特に都合が良いのは、クズカゴが必要時に自分の傍に来てくれることではないかと思う。[16]

と論じている。このように病院におけるビハーラ僧の役割が、動く屑籠（moving wastebasket）のように、患者の悲嘆や思いをそっとそばで受けとめることであることがわかる。

さらに、森田敬史は「遺族による仏堂の活用実態とその宗教的意義」について研究発表した。[17] その論文で、二〇一一年度の緩和ケア病棟の全国平均在院日数が三九、五日であるのに対し、長岡西病院ビハーラ病棟の過去五年間の平均在院日数が五九日であるという実証データを森田は提示した。単純に在院日数だけで比較はできないが、他の病院ではほとんど見受けられない仏堂という場があることによって、患者と家族の悲しみや怒り、疲労感、孤独感が和らげられていることがわかる。特に、病院内の仏堂は敷居がなく、「ふらっと立ち寄る感覚」を大切にされている。実際に患者が亡くなって退院した後も、遺族が病院に立ち寄ることができる。病院内の仏堂では、患者とビハーラ僧と病棟スタッフとの

関わりが生まれ、宗教的な礼拝に自由に参加できることにより、仏に見守られている安心を感じて人生をふりかえり、その人だけの人生の物語に宗教的な意味が付加される。このように病院内仏堂は、患者だけでなく病棟スタッフが自然に立ち寄ることのできる宗教的空間であり、自分を静かにふりかえり、人生の意味を再確認できる場である。その意味では、病院内仏堂は、病院の日常の中に非日常の聖なる時間と空間になっているといえるだろう。

2　ビハーラ花の里病院

医療法人微風会 ビハーラ花の里病院は、広島県三次市に位置し、一九九〇（平成二）年に浄土真宗本願寺派法正寺第十八代住職の和泉慧雲によって開設された[18]。

ビハーラ花の里病院には、『無量寿経』讃仏偈の「吾誓得仏　普行此願　一切恐懼　為作大安」（『聖典全書』一巻二一頁）の経文が掲げられている。この経には、遥かなる過去に一人の国王が、世自在王仏の説法を聞いて感動して発心し、国も王位も捨てて、出家して法蔵と名告ったことが説かれている。讃仏偈とは、法蔵菩薩が、師仏である世自在王仏の光り輝く姿を讃えた偈であり、師仏が戒、聞、精進、三昧、智慧の功徳をもって、世界の闇を照らし救う仏であることを法蔵菩薩が称賛し、法蔵菩薩自らも師仏のように智慧と慈悲をもって、苦悩する人々を救う仏に成らんことを誓った偈である。法蔵菩薩は諸仏の国土を見て五劫思惟し、一切衆生を救わんとする四十八願を発願し、果てしない修行を経て、阿弥陀如来となられた。先の文は、法蔵菩薩が自ら「われ誓ふ、仏を得たらんに、あまねくこの願を行じて、一切の恐懼に、ために大安をなさん」と誓った言葉である。すなわち、法蔵菩薩が、すべての悩み恐れる人々に安心をえさせたいと誓った願いである。讃仏偈の終わりには、道を求めて、たとえこの身がいかなる苦難に沈むとも、我が行は精進して耐え忍び、ついに悔いることはないと説かれている。

和泉慧雲は、この仏の誓願をビハーラ花の里病院の願いに重ねて、「病みて悩める人々の安らぐ家とならむかな」という願いのもと、高齢者医療、慢性疾患の治療、神経難病に対する医療が充実し、仏教による安らぎを患者や家族に届けることをめざした[19]。ビハーラ花の里病院は、病気に苦しむ人々に、仏に照らし護られているというぬくもりを与える医療福祉機関であり、悩める人々の憩う家になってほしいという願いがこもっている。実際に、患者の要望に応えて、ビハーラ花の里病院の敷地内に鐘楼が建てられている。患者や利用者は、車いすに乗ったままで紐

を手に取って鐘をつき、鐘の声を聞くことができる。社会福祉法人慈照会の高齢者福祉施設も併設されている。

特に、広島・県北仏婦ビハーラの会は、一九九〇年から、仏教婦人会を中心に患者や家族、また病棟スタッフを援助するボランティア活動をつづけている。なぜ三十年も、ビハーラ花の里病院で、広島・県北仏婦ビハーラの会の活動がつづいてきたのだろうか。広島・県北仏婦ビハーラの会発起人の藤井睦代によると[20]、ビハーラ活動を継続することができたのは、次のような活動の特質があるからである[21]。

（1）自主的な奉仕活動である。

（2）看護師の補助的な作業を行い、直接的なケア、介助は行わない。傾聴ボランティアを柱とする。

（3）「してあげる」ではなく「させていただく」。

（4）現場の医療専門職の理解をえて、既存の枠組みを超えた自由な活動である。

広島・県北仏婦ビハーラの会のメンバーは、医療スタッフの陰の力となって、同じ悩みを抱えた同朋として、患者の気持ちを聞き学んでいることがわかる。また、このビハーラ花の里病院の特色の一つは、亡くなった患者の物故者追悼法要が営まれていることである。患者は、生きている間だけでなく、亡くなった後も大切にされている。一方、長年の活動からわきおこった問いもあった。ビハーラ活動はボランティア活動とどこが違うのかという問いである。広島・県北仏婦ビハーラの藤井睦代、ビハーラ山口で代表を務めた中村博は、ビハーラ活動ならではの特色をノートに記録していた[22]。ビハーラ活動は「願われたいのちの尊さに気づかされ、共に真の安らぎをうる活動」「深くいのちを見つめる活動」「苦しみや悲しみのなかにいる人々のそばに寄り添い、そこにいることの意義を見出す」「摂取不捨や一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり等のみ教えに支えられている」「してあげているのではなく、させていただいている。いつも阿弥陀様と共に活動する」。特に、藤井睦代は、病気で悩んでいる患者にかける言葉がみつからなくても、「おまかせよね」という気持ちをもって接していると教えてくれた。このようにビハーラ活動は、この「させていただく」という表現に象徴されているように、仏と共に活動させていただくことであり、医療福祉機関などにおいて、患者や施設利用者を支援しようとする自分自身が、相手に支えられ、人生の意味に気づかされる活動である。

3　社会福祉法人光輪会　橘保育園・橘デイサービスセンター

社会福祉法人光輪会橘保育園・橘デイサービスセンターは、宮崎市の中心地に位置し、一・二階が保育園、三階がデイサービスセンターの統合型社会福祉施設である。[23]

一九五三（昭和二八）年、橘保育園は戦後の復興期、母親の就労増加のため家庭保育に欠ける幼児を保育せんと、宗教法人浄土真宗本願寺派安楽寺の社会奉仕活動として、宮崎県知事の認可を得て開設された。第三代の弘中信厚園長は、ある日、高齢者福祉施設からの依頼を受けて、保育園児を連れて、その施設を訪ねて交流した。その時、園児のなかから「怖い」「気持ち悪い」などの言葉を発する子どもが数人いて、教育的課題として取り組み始めた。橘保育園では、その後、月一回、園児とお年寄りが自然に交流できる機会として、「お年寄りとのふれあいデー」を催した。すると園児はお年寄りの優しさに触れて、お年寄りに対していたわる気持ちが自ずと生まれ、一緒に遊ぶようになった。

こうして一九九六（平成八）年から、橘保育園と同じ建物の三階に、橘デイサービスセンターを開設した。橘デイサービスセンターは、「老人デイサービスセンター事業（通所介護事業）であり、お年寄りの自立的生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持向上とともにご家族の身体的・精神的負担の軽減を図ることを目的として、次のようなサービスを提供する事業。①送迎、②健康チェック、③リハビリ（機能回復訓練）、④入浴、⑤昼食、⑥レクリエーション」である。

一九九七（平成九）年より、配食サービスたちばなを始めた。それは「宮崎市生活支援配食サービス事業、おおむね六五歳以上の単身世帯、高齢者のみの世帯およびこれに準ずる世帯ならびに身体障害者の方で、老衰、心身の障害等の理由により食事の調理が困難な方に対し、栄養のバランスのとれた食事を調理し、定期的に訪問配食して当該利用者の安否確認および健康状態等の確認を目的とした事業」である。

二〇〇四（平成一六）年より、たちばな居宅介護支援事業を開始した。それは「介護支援専門員（ケアマネージャー）が常駐し、介護を必要とする人および家族の介護保険に関する疑問や要望を伺って、適切な介護サービスの計画（ケアプラン）を作成したり、行政や介護施設との連絡調整・利用申請手続き等の代行なども行う事業」である。

二〇〇六（平成一八）年より、ビハーラ橘ヘルパー派遣センターの事業、すなわち、「訪問介護事業　利用者の自宅を訪問して、身体介護・生活援助の介護サービスを提供する事業」をも手掛けている。[24]

ビハーラの理念を機軸にした橘保育園の保育目標は、次の通りである。[25]

保育方針「橘保育園では、園児一人一人が、かけがえのない一人格者であることを十分認識し、どんな場合も子どもの人権に配慮し、身体的苦痛を与えたり、人格を辱めたりすることのない、一人ひとりのお子様を尊重した保育を方針としている。」

保育目標「感謝＝仏様を拝みありがとうが素直に言える人に。和合＝思いやりのある人に。奉仕＝お手伝いをすることに喜びを感じる人に。」

以下は、橘保育園・橘デイサービスセンターにおいて、二〇一三年から龍谷大学大学院実践真宗学研究科の臨床実習を積み重ね、参与観察を通して学んだ内容である。

保育部門では、陶山久美子主任保育士と中馬恵美子副主任保育士が次のように教えてくれた。

保育士は、子どもの発する言葉に意味づけをする。子どもの声を拾う。子どもは認められる言葉を浴びるとキラキラ輝く。けんかも大事である。なぜなら仲直りするチャンスにもなるからである。けんかが生じたら、自分と相手がどのような気持ちになっているかを園児自身に問いかける。園児は自分の気持ちをふりかえり言葉にするうちに、相手の気持ちにも気づく。やがて葛藤しながらも、相手を認めることができるようになる。

この言葉は心に残る言葉の一つである。園児は仲が良いが、時折けんかをすることもあり、その場合、どのように向き合ったらよいのかに戸惑い、陶山主任保育士に尋ねた時、教えてくれた言葉である。対立も理解しあえるチャンスである。なぜ対立したのかと自分に問いかけ、相手の気持ちを考えてみる。葛藤しながらも自分とは違う相手の気持ちを知ると、相手を許すこともできる。これは大人にも求められる姿勢である。そして、「子どもの声を拾う」という姿勢は、相手の思いを尊重するスピリチュアルケアの基本そのものである。ともすれば、相手の気持ちを理解するために、その人の気持ちを無理に「聞き出そうとする」「引き出す」ことになりがちである。傾聴がすべてではない。話すのもつらい時がある。相手が自然に発する言葉がその人の本心につながっている。だからこそ相手から生まれてくる言葉を待ち、その言葉の意味を一緒に考え、確認しあう。子どもや女性、患者など、弱い立場のものほど遠慮しがちである。だからこそ「その人の声を拾う。人は認められる言葉を浴びると輝く」ということを人との関わりにおいて尊重したい。心のケアとは、急いで解決のゴールを求めるのではなく、ただ自分の気持ちを互いに分かち合って、ありのままの自分でいられることであると気づかされる。

実際に、園児と保育士の語りあいを通して、次のような園児の気づきが生まれている。

「七夕フェスタ」で自分たちの〝願い〟について語りあいましたね。最初は、「おもちゃが欲しい」などの自分への願いだったお友達も、「おうちの人のお手伝いをしてあげたい」や、「小さなお友達のお世話をしてあげたい」などの自分だけではない、他の人達を想う〝願い〟もあることに気付きましたね。口蹄疫で殺処分のニュースが流れ続けた時期だったこともあり、「豚さんや牛さんを助けたい。」「豚さんや牛さんを助けるために一生懸命働いている人達が、頑張ってほしい」という願いが聞かれるようになりました。その願いを聞いたとき、優しい心をもっている松組さん（五歳児クラス）にとても感動しました。お友達同士、「願い」を考えあい、話しあうことで、色んな考え方があることを知りましたね。自分だけの願いではなく、いろいろな人や物へ目が向けられるようになった松組さん。そのきっかけとなった「七夕フェスタ」はお友達の存在をとても大切なものだと考えさせられました。(26)

ここに七夕の願いについて園児と保育士が語りあううちに、園児は、自分のための願いから、家庭や友達の手伝い、さらには動物を愛護したい願いや豚や牛を助けるために働いている人々を応援する願いへ広がっている。保育士は園児達の優しい気持ちに心動かされている。「子どもの発する言葉に意味づけをする」「子どもの声を拾う」という保育士の優しさが園児の優しさを育んでいる。発言がさえぎられず、自分の言葉が認められる場を保育士が築き、友達と語りあうことが続けられたからこそ、自分だけの思いを省み、他の人々や動物のつらさを思いやる優しい心が生まれたのだろう。いやそうした優しさは誰もが本来もっているにちがいない。語りあえる安心が気づきをもたらすのだろう。

また、注目すべきことは、保育園とデイサービスセンターを統合することによって、保育園児と高齢者の双方に大きな変化が生まれていることである。具体的には、主任保育士によると、橘デイサービスセンターのある三階に、百華園という庭があり、その庭にプランターをおいて、農業高校元校長の加藤研悟講師が、園児にお米作りを指導している。園児とデイサービスセンター利用者が一緒に田植えをする。水をやりつづけ、やがて夏を過ぎて稲が実ると、稲刈りをデイサービス利用者が園児と共に行い、収穫したお米を脱穀する。しかし、初めての年は、プランターでとれたお米はわずかだった。雀が上手に稲を食べに来て、精米機にかけてもほとんどお米が獲れなかった。それで、もみ殻を手でとって米粒を取りだし、購入米を少し混ぜて、ご飯を炊いた。ついに炊きあがったご飯を園児が頂いた。保育の先生が「よく噛んで食べてみてね。作ったお米の味はどう?」と尋ねると、園児らは「甘い!」と歓声をあげた。デイサービス利用者は、うれしそうに笑みを浮かべ、園児も一緒

に喜ぶ。稲作を通して、田植えからお米になるまでに、季節が移り変わり、陽の光や雨水や土の恵み、雀除けネットをかけるなど、これほど多くの人の手がかかるのかということに子どもたちは気づく。お米作りを通じて、利用者と園児は世代を超えて心が通い合う。また、子どもの日や七夕フェスタ、夏まつりなどの行事に際しては、利用者が園児たちのことを思って、広告紙を利用して折り紙の兜などの手作りの品物を作りプレゼントする。また、「お店屋さんごっこ」では、画用紙や折り紙で作った野菜や果物、ハンバーガー、おにぎりの入ったお弁当、ケーキ、アクセサリー、お絵かき帳などクラスで話し合ってお店を出す。デイサービスの利用者も、トイレットペーパーの芯を利用した眼鏡、チラシを切り抜いて作った時計などを製作する。子どもらが「お店屋さんごっこ」をすることで利用者が子どもと関わることができる。利用者は作品を準備する段階で、必要な数を考えたり、作品を作れなくても作品数を数えたりしてリハビリになる。お年寄りは子どもが喜ぶ顔を楽しみにして、デイサービスセンターに来てもらえる。また園児も自分たちが作った品物をお年寄りに手にしてもらえるので、利用者と同じように園児にも楽しみがある。例えば、園児は丸めた新聞紙に茶色を塗ってパンにみたてた作品を作る。さらに、夏のプール活動の時期には、五歳児クラスの担任が水着を着た子どもたちを、「今年のファッションショーです」とお年寄りに紹介して、デイサービスセンターの部屋を通ってプールに連れていく。普段子どもたちと触れ合うことのない利用者にとって和やかな時間となる。例えば、プール活動ができずに見学だけで過ごす園児も、お年寄りとプール活動を見ながら過ごすことで居心地のいい時間となり、そうした園児の喜びが連絡帳を通して保護者から伝わってくる。園児らは、芋掘りを利用者と一緒にすることもある。サマーキャンプなど屋外で体験したことを、三階のデイサービスの利用者に楽しそうに報告する。園児らが作った作品を利用者にさしあげたりもする。そのたびに利用者は園児に感謝の気持ちを伝える。さらに、月一回、「お年寄りとのふれあいデー」がある。松組（五歳児）の子どもたちは、地域のお年寄りを招待して、一緒に遊んで食事を楽しみ、お年寄りとのふれあいによって、自然に思いやりの心が育つ。これらの事例は保育園とデイサービスセンターの統合施設ならではの特色である。

子どもは未来、未来が現在を支えている。子どもが輝けば、あなたもきっと輝いてくる。

この陶山主任保育士の言葉の通りである。保育園とデイサービスセンターを融合した施設では、子どもとお年寄りがごく自然に交流できて、保育スタッフ、調理スタッフ、介護スタッフ自身がそれを見守り、園児と利用者の言葉や姿を意味づけ、一人ひとりが互いに光を受けて輝いている。子どもは、お年寄りに元気を与え、お年寄りは、子どもに安らぎを届けている。

いのちの教育において食育は大切である。「調理師はありがたい保育のスタッフである」と主任保育士は教えてくれた。保育園に入ると、調理室からいい匂いがする。食品冷蔵のショーケースを園児は見て、「これ食べたね」と話しかける。調理室は園児一人ひとりの成長を見守っている。ご飯をいただくという普通に見えることは普通ではない。一皿一皿のおかずやご飯がいのちの教育になる。そこで具体的に、陶山主任保育士の記録したサマーキャンプでの出来事を紹介したい。

修行の旅一日目の夜中…。皆が寝静まった頃、朝ごはんのメニュー、じゃことニラ入り卵焼き・ウィンナー・お味噌汁とご飯について調理師が悩んでいました。卵除去対応のAさんのことで長尾先生が、「Aさんは、卵除去なのでお母さんとは、卵焼き無しでの打ち合わせでしたが、何かしてあげられないですかね」と相談。…中略…何か変わるもので提供できないかと考えました。「黄色いもので…。食紅とかで色つけしたり、卵のように似たもので…」「えびはあるから、すり身にして…」「はんぺんなら、カレー粉で焼けば…。はんぺんはないし…」「高野豆腐なら、あるから、それをカレー粉で焼いてみましょうか」という結論になり、「やってきます！」と調理室へおりました。少し経って「先生！どうですか?」と戻って見せてくれたものは黄色い卵焼きのようになっていました。「高野豆腐」と言われなければわからない見た目です。味見をすると、とっても美味しい仕上がりになりました。後藤先生と食べて、竹ノ内先生と検食しあいました。「いいね！いける！」「Aさん、みんなと一緒で喜ぶはず！」とできあがったのは、朝方でした。弘中信厚園長先生、弘中直子先生からの「OK！」も出ました。皆は五時起床。朝の散歩にでかけたあと、朝ご飯作りになりました。グループで朝ごはんを作っていきます。次々とできあがり食べる時間になったころ、皆はテーブルにグループごと座っています。テーブルには朝ご飯が並びました。Aさんのお皿には自分で焼いたウィンナーのみ。隊長は皆の前で卵焼きのおかわり分を作ってくださいました。そして、隊長が、「Aさんには、特別に！」と卵焼き風、高野豆腐をフライパンで焼いてくれました…。子ども達は、ずっと一緒に生活をしてきているので、Aさんが卵を食べられないことは知っていたので、口々に「良かったね～！」と、自分のことのように喜んでくれていました。「特別だ！いいなぁ～」と皆、本当に嬉しそうで自分のことのように喜び合う姿に感動しました。うれしい、楽しい朝食の時間になりました。松組の皆のおかげで、私たちは大事なことを学ばせてもらったように思います。修行の旅は、子ども達だけでなく、スタッフの修行の旅でもあった大事な時間でした。大事な夏の日を過ごしてから半年…Bさんが、「先生、修行の旅の時、Aさんの朝ごはん、卵焼きを一緒に食べられてよかったがね！おいしそう

だった」と話してくれました。時間を経てもなお、その様子を楽しかった思い出としてBさんの心に刻まれていたことを、うれしく思いました。[27]

この文を読んで、園児のAさんが、卵焼き風のカレー粉つき高野豆腐を食べられて喜ぶ顔、それを見た他の子ども達も一緒になって喜び合う姿、それに感動して一緒に喜ぶ園長や保育士たちの姿が目に浮かび、筆者も読み返すたびに感動した。Aさんを迎えに来た保護者も泣いて喜ばれたという。そしてその感動が時を経ても、Aさんの友達の心に残っていることにも保育士が気づいて喜んでいる。ここに食育がいのちの教育であり、調理スタッフもありがたい保育スタッフであることがわかる。このサマーキャンプの朝ご飯が、子ども達が喜び合えるかけがえのない朝ご飯になったのは、保育士や調理師たちのあきらめずにAさん一人のことを考えつづけた優しさと創意工夫があったからである。実はこの保育士は、五年前、オムライスが食べられない一人の園児のために、調理師がカボチャをペーストさせて、卵の代用をして見た目は同じオムライスを考案して作ってくれたことを思い出したと記している。その時、園児はカボチャで作ったオムライスをうれしそうに食べ、その園児の喜ぶ姿を見て保育士も調理師も喜んだ。さらに、保育士は園児の母親を食事のショーケースに案内し、その園児がおいしそうに食べられたことを伝えると、園児の母親が涙目になって喜ばれたことが心に残っていた。その五年前の感動が保育士の心によみがえり、卵焼きを食べられない子どものために調理師に相談し、もう一度五年前のように、食べられないものの代わりに何かを食べさせてあげたいと思ったのである。食べられないものがあっても、それを代用する特別の食事を作って、皆で一緒に食事をいただける幸せや喜びが、どれほど食べられない子どもやそれを見守る人達にぬくもりと感動を生み出すかが伝わってくる。

仏教を背景とした保育園ならではの特色に、本堂仏参や合同仏参がある。「お仏参は、毎朝仏さまと子ども達と保育スタッフの我々が自分に向き合える大事な時間である。心の眼を開き、いろいろなことを感じることができる。自分に気づくことができる時間である」と主任保育士は教えてくれた。梅組（三歳児）、菊組（四歳児）、松組（五歳児）の園児は、毎月、安楽寺の本堂に参拝し、園長が講話をする。しかもその園長の講話について各クラスで園児とふりかえり、保育士は本堂仏参の講話と園児の感想を報告文書にまとめて、保護者に伝えている。保護者はその報告書を読んで、園長講話や子どもが園で感じている気持ちを知ることができる。

介護部門には、デイサービスセンター、配食サービスたちばな、たちばな居宅介護支援事業、ビハーラ橘ヘルパー派遣センターがある。

配食サービスたちばなは、食事の調理が困難な方に、栄養バランスと季節感のあるお弁当を、雨にも負けず風にも負けず、猛暑の日も台風の日も寒い冬の日も届ける。保育園の厨房で甲斐公子調理主任（栄養士）をはじめ調理スタッフが愛情をこめて調理し、介護福祉士、栄養士、調理師、保育士などの専門職が連携し、配食弁当を笑顔で利用者の家まで届ける。[28] 配食サービスでは、日々そのお弁当の写真を撮影して記録し、毎日利用者からいただくお礼状などを大切に整理している。例えば、「スパゲティナポリタンの味はキラリと輝く青春の味を思い出させ、里芋の味噌田楽はホッとする」といった利用者の感想である。別のある利用者は次のような感想を配食サービスのスタッフに寄せた。良永則子ケアマネージャー（介護支援専門員）は、利用者の感想をこう記している。

「きのうのお弁当は特別においしかったわあ！あのお寿司、お母さんを思い出しながらいただいた。食べたら涙がぽろぽろでたわ。」「兄弟も子どもも誰もいないのに、配達してくれる人は皆優しくて、人生捨てたもんじゃないなと元気づけられるわ。これからも頑張ろうと思う」と話してくださった。日々の出会いはほんの短い時間だが、これからも笑顔と元気と、そして真心を届けよう！と、逆に私が励まされた思いがする。[29]

こうした利用者の感想が食事の大切さを教えてくれる。日々の利用者の笑顔と感想が明日のお弁当づくりの励みになる。ある保育士が「私達はお弁当という『物』を届けるのではなく、『心』を届けたいと思っています」と話した言葉が、配食サービスの意味を示している。特に、お弁当を届けることがそのままその利用者の安否を確認し、命を守ることになる。実際に、配食のお弁当を自宅に届けた際に、風呂場で動けなくなっていた利用者を発見して救出できたケースや、利用者自身が動けなくて困った時に、お弁当箱の蓋に印字されている施設の電話番号に電話をかけて、救助されたケースもあるという。すなわち、配食サービスは、一人暮らしの高齢者の生命を守る仕事なのである。チームの一員である弘中妙子配食サービス主任は、配食弁当を届けた時に、「また明日きますよ」と声をかけるようになったという。こうしたあいさつが相互に明日への希望となるからである。

ビハーラ橘ヘルパー派遣センターの前屋敷悦子主任は、ヘルパーの役割にはおよそ三点があることを教えてくれた。①家事援助（掃除、洗濯、調理など）、②身体援助（入浴介助、服の着替え、つめ切り、オムツ交換など）、③心のケア（あいさつ、明るく笑顔で声をかけて話をする）の三つであるという。実際に、筆者もこの前屋敷主任と利用者の自宅に訪問し手伝わせていただいたことがあった。ここで施設と利用者の許可を

得て、未来に継承したい事例を紹介したい。

ある日のことであった。Mさんが妻と共に臨床宗教師研修生の我々僧侶が来るのを特別な想いで待っていた。配食のお弁当を手渡すと、二人はお礼を述べられ、その後、仏壇の前で合掌した。それから、その男性は今までずっと胸に秘めていた戦争体験を我々僧侶に話した。「戦場は暗く怖く、私たち兵士は逃げまどい、自分の近くで仲間は銃に打たれて亡くなった。自分は生き延びたが、戦争の怖さや非情さを今まで話せなかった。言いようのない虚しさが心に残っている。戦争をしてはならない。人のいのちは本当に尊いものだ」と静かに語った。我々僧侶らはうなずいてただ聴いた。つづいて、その男性は、横に並んで座っていた妻に対する気持ちを語った。「生き残った私と結婚してくれて感謝している。これまで毎日支えてくれて、今そばにいてくれる。こんなに幸せなことはない」と彼は語った。それを聞いたMさんの妻は、「今まであなたの仲間が戦争の時に目の前で亡くなった話を聞いたことがなかった」とぽつりと話した。Mさんの妻は戦地での夫の怖く悲しかった話をはじめて聞いて驚いていた。しばらくして妻は、「今まで夫はとてもつらかったのだと思います。お坊さんに聞いてもらえてよかったね。あなた…」と話した。すると、Mさんは、「戦争で死んだかもしれない俺が、妻や多くの人々に生かされている。仲間のことを思うと悲しい。けれども、あなたと結婚して一緒に過ごせることが幸せだ。私が今まで生きてこれたのは、命が助かって、あなたに支えてもらったおかげだ。きょう大学の先生と学生が来てくれたので、はじめて戦争の時の悲しみを話せた」と、静かに語った。筆者は戦争の時に銃で撃ち合う恐ろしさが目に浮かび、無残にも亡くなった方々を思うと胸が痛くなった。しかもMさんが妻に今生かされていることを幸せに感じていることを知って、心があたたかくなった。「戦争でつらかったご経験をお話しいただきありがとうございます。悲しいお気持ちが伝わってきました。私たち僧侶が平和への願いをしっかりと受けとめさせていただきます」と私は話した。Mさんは、「僧侶の皆様からきょう話した戦争経験を伝えてください」と語った。Mさんは真実の話を我々に吐露することで、生き残った者の務めを果たそうとしたのではないかと感じた。また翌年も、Mさんの依頼を受けて自宅を訪問させていただいた。Mさんの妻が亡くなったことを社会福祉法人光輪会の介護職員が私に報告してくれたからである。その男性の自宅で、はじめに仏壇に手を合わせて、追悼の勤行をした。お仏壇にはMさんの妻の写真が飾ってあった。その男性は「お参りくださりありがとうございます。寂しくなりました。毎日、仏さまの妻に話しかけています」と話してくれた。せつなかった。このように配食サービスは、その利用者の安否確認になり、日常生活を変わりなく支えつづけることになる。さらに、僧侶が訪ねて、仏壇に手を合わせて挨拶をする

ことを通して、人生における悲しみをありのままに話せる雰囲気も生まれている。仏は自分の人生の全行程を受けとめてくれる依りどころであり、死を超えてつづく妻と自分とのつながりを見守っていてくれる。それを配食サービス利用者のMさんと介護職員が教えてくれた。

デイサービス部門の宇都宮幸美主任は、認知症を含めた高齢の利用者に接する際に、最も大切にしている姿勢について、こう教えてくれた。

ご利用者が一人一人、家にいる時のように、気ままに過ごしていただけることを大切にしている。

それでも実際には、デイサービスセンターの雰囲気に慣れるのに時間のかかる利用者もいるという。その時はどうすればよいのか。

自分から相手を受け容れないと、相手も自分を受け容れてくれない。一期一会の気持ちで、こちら側から「ありがとうございます」と声をかけると、相手も声をかけてくれるようになる。

このようにデイサービス部門の宇都宮主任は教えてくれた。うまくいかない理由を相手に探すのではなく、関わる自分自身が相手に精一杯向き合って、笑顔で声をかけると、相手も徐々に心を開いてくれるのである。

そして宇都宮主任は、心に残った事例を紹介してくれた(30)。

Hさんはデイの忘年会で、Aさんと一緒に出演するのを楽しみにしていた。忘年会の前夜、Hさんはご病気で倒れられた。忘年会当日、Hさんの代役を園長が勤め、Aさんと園長が「ゴンドラの唄」を披露した。Hさんがまるで一緒に歌っているようだった。Hさんが亡くなられた時、そのご遺体のそばで、息子さんや娘さんと園長、副園長も加わって、「ゴンドラの唄」を歌った。忘れられない歌になった。これからもご利用者の皆さまが、自分の居場所を感じていただける雰囲気づくりに心がけていきたい。

ここに明らかなように、利用者にとって橘デイサービスセンターは、自分の居場所を感じられる場であり、介護スタッフは利用者が気ままに過ごせる雰囲気づくりに心がけていることがよくわかる。社会福祉法人光輪会の各施設には、仏壇が安置されていて、仏の慈悲に見守られていることが感じられる。さらに、ビハーラの精神に溢れる社会福祉施設として特筆すべきことがある。このデイサービスセンターの利用者は、生きている時だけでなく、亡くなった後も、施設の職員や僧侶に大切にされる。利用者本人と家族の了解のもとで、亡くなった後、その利用者の氏名と法名、戒名、聖名などの聖なる名をデイサービスセンターの物故者として記録し、仏壇の前にそなえて大切にしている。

弘中信厚園長は、社会福祉法人光輪会の事業理念について、こう記している。

社会福祉法人光輪会は、利用者お一人お一人が日々喜びを持ってその人らしく生活されることを支援するサービスを提供します。サービス提供にあたっては、児童福祉法、子ども・子育て支援法、老人福祉法、介護保険法等、関係法令を遵守したうえで、全スタッフが十分に連携し合って利用者お一人お一人のニーズにお応えするとともに、「やすらぎと感動」に究極する顧客満足の更なる向上に努めます。光輪会スタッフは絶えず自己研鑽に励み、感謝・和合・奉仕の心を勤務姿勢として、明るさと温かさとが通い合う場づくりをもっとも大切にします。

仏教を基盤とした保育目標と老人デイサービスの目的についてこう明示している。

橘保育園では、園児一人一人がかけがえのない一人格者であることを十分認識し、どんな場合も子どもの人権に配慮し、身体的苦痛を与えたり人格を辱めたりすることのない、一人一人のお子さまを尊重した保育をすすめます。

保育の目標を実現するために、橘保育園では、次に掲げる諸事項を基本方針として保育をすすめています。

ア　十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持および情緒の安定を図ること。

イ　健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。

ウ　人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にする心を育てるとともに、自主、自立および協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。

エ　生命、自然および社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。

オ　生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。

カ　様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。

日々の保育は、お子さまの発達段階や個性に十分配慮して、保育の計画（保育課程および指導計画）を作成してすすめています。また、子ども一人一人の性差や個人差に留意しつつ、性別による固定的な役割分業意識を植え付けることのないように配慮します。

保育目標は、感謝、和合、奉仕の三つを掲げている。

1．願いに生かされ支えられている自らのいのちの尊さに気づき、豊かな想像性をもった明るく温かな心を養う。（感謝）

2．世界に開かれた心をもって、他者との関わり合いのなかで創造的に自己を実現していこうとする主体性を養う。（和合）

3．基本的生活習慣を身につけるとともに自ら心身を整え、すすんで人のことを考えて生きようとする意欲を養う。（奉仕）

橘デイサービスセンターの目的は次の通りである。

お年寄りの自立的生活の助長、社会的孤立感の解消、心身機能の維持向上とともに家族の身体的負担の軽減を図ることが目的である。

弘中園長は、ビハーラ活動の基本として大切にしている姿勢がある。

「本物はつづく、つづけると本物になる」。教育者の故・東井義男さんのこの言葉を大切にしている。本物とは何か。それを追い求めていくところに本物がある。ビハーラ活動において大切な姿勢は何か。それは関わりをもって接しているその方の向こうに、自分自身の姿や家族の姿が見えてくるかどうかである。

こうした園長の示す光輪会の理念を、園児、保護者、利用者とともに、保育・介護スタッフ全員が共有している。主任保育士は「職員もつねに迷いの中にある。スタッフの間に意識のずれが生じたら、「感謝・ありがとう、和合・すみません、奉仕・どうも」の原点に立ち返って、努力し続けたい」と教えてくれた。副主任保育士は「ビハーラはオアシスのような空間を意味すると学んだ。この社会福祉施設もオアシスのようにくつろげる居場所になるようにしたい」と語った。このように多職種のスタッフが日々悩みながら、保育や介護の姿勢をふりかえっている。チームで、相互の立場を認め合うとともに、改善に向けて努力し、自らの姿勢を問いつづけている。仏教精神を背景とした保育と介護は、仏の智慧と慈悲の光に照らし護られている安心や、スタッフの懸命な支え合いを通して、園児と利用者とスタッフの心にぬくもりと感動が生まれている。「一人ひとりがその人らしく輝くこと」を目標とし、スタッフが精一杯子ども達や利用者と向き合う中で、「歓声、喜びあい、ねぎらいあい、笑顔に包まれた時間」[31]が生まれている。

4　あそかビハーラ病院　独立型緩和ケア病棟の理念

二〇〇八年、あそか第2診療所ビハーラクリニック緩和ケア病棟（一九床）が、京都府城陽市に設立され、二〇一四年、あそかビハーラ病院、独立型緩和ケア施設（二八床）に認定された。そこには、わかりやすく基本理念と活動方針が掲げられている。[32]

独立型緩和ケア病棟　あそかビハーラ病院（二八床）

基本理念

あそかビハーラ病院は、仏のお慈悲の「ぬくもり」の中、生かされて生きる「おかげさま」のこころで、やすらぎの医療を実践します。

基本方針

（1）　私たちは患者さん・ご家族の尊厳を守り、あたたかな配慮をもって対応していきます。

（2）　私たちは緩和ケアの実践力を高め、安全・安楽で質の高い医療を提供していきます。

（3）　私たちは互いを尊重しあい、多角的な視点をもって、質の高いチーム医療を実践します。

活動方針

（1）　私たちは「ぬくもり」と「おかげさま」に基づく信頼関係を大切にします。

（2）　あなたの身体的、精神的、社会的、スピリチュアルな苦しみに耳を傾け、あなたらしく生きられるように援助します。

（3）　あなたとご家族が望むときに、ご家族もケアに参加できるように援助します。

（4）　愛する人との別れからくる、ご家族の悲しみにも寄り添います。

（5）　他の医療・福祉施設や寺院と連携し、地域とともに歩む病院をめざします。

（6）　ビハーラの理念のもと、教育や研修に努めます。

（7）　限りある命のなかで、限りなきいのちの尊さ、その気づきを大切にします。

このようにあそかビハーラ病院の実践理念は、仏の慈悲に照らされている「ぬくもり」と生かされて生きる「おかげさま」の心で、安穏の医療を実践すると掲げられている。ビハーラ活動を実践する依りどころには、尊卑賢愚に拘わらず、一切衆生を苦悩から救わんとする阿弥陀仏の本願がある。自分自身が見捨てられず仏に願われているという安心がある。ビハーラ活動とは、支えあって生かされているという仏教の縁起的生命観、仏の摂取不捨の悲願を依りどころとし、患者が願われたいのちをその人らしく生きられるように援助し、「ぬくもり」と「おかげさま」の心で安らぎの医療を実践している。

ただし、あそかビハーラ病院の方針に、「患者様それぞれの宗教を尊重し関わりをもたせていただきますので、ご安心して過ごしていただくことができます」と示されている。すなわち、ビハーラと冠する病院、社会福祉施設では、患者の信仰を尊重し、宗教勧誘を行わないことが原則である。他面、あそかビハーラ病院内のビハーラホールでは、礼拝の時間があり、患者や家族が自由に参加できる。常駐僧侶のビハーラ僧に患者が自らの心境を吐露し、死とめぐる不安と希望を相談できる。患者が亡くなった時には、病院内でお別れ会を開き、患者の家族と医療者と僧侶が亡き人を偲ぶひと時をもっている。また常駐僧侶には、医療スタッフの悩みを聞き受けとめるという役割もある。

5　あそかビハーラ病院緩和ケアの目標と特質「ぬくもり」と「おかげさま」

では、緩和ケア施設とは、安らかに死ぬための場所なのか。あそかビハーラ病院院長・緩和ケア医の大嶋健三郎は、こう記している[33]。

よくホスピスは「死に場所だ」と言われます。「あそこに行ったら死ぬ時だ」と。私はそう考えていません。がんで死に逝く人たちは、死の瞬間まで生き抜く人たちです。確かに多くの場合、ホスピス・緩和ケア病棟は、死に場所になります。しかしそれ以上に、最後の瞬間まで生き抜く場所でもあるのです。

大嶋院長は、二〇一四年度からの実践真宗学研究科の臨床宗教師研修に際して、あそかビハーラ病院でこう教えてくれた[34]。

私が大切にしているセント・クリストファーズ・ホスピスを設立したシシリー・ソンダースの言葉がある。

「あなたはあなたのままで大切です。あなたの人生の最後の瞬間まで大切な人です。ですから私たちはあなたが安らかに死を迎えられるだけでなく、最後まで生きられるように最善を尽くします。」

Dame Cicely Saunders, (1918–2005), who is the founder of the modern hospice, St. Christopher's Hospice in 1967, shared the following words.

"You matter because you are you, and you matter until the last moment of your life. And we will do everything we can to help you, not only to die peacefully, but to live until you die."[35]

患者は死ぬためにこの病院に来たのではない。緩和ケア病棟は、患者が人生最後の一日を生きる場所である。医師は生きるためのお手伝

いをする。逃げられない患者から逃げたら、患者は孤独になる。緩和ケアチームの姿勢は、向き合うことである。

時間の長さではなく、その患者と家族の残された時間の人生設計を誤らないように支援する。先延ばしにしない。それが緩和ケアの姿勢である。

緩和ケアの姿勢を表す言葉に、"Not doing but being."という言葉がある。「何かをすることではなくてそばにいること」という姿勢である。もちろん、緩和ケアの医療において"doing"することはたくさんある。世界保健機構による緩和ケアの定義に示されているように、緩和ケアは「患者の痛みや身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、適切なアセスメントと対処（治療・処置）を行うことによって、苦しみを予防し、和らげることで、クオリティ・オブ・ライフを改善するアプローチ」である。患者の全人的苦痛が緩和されるように医療的措置が最も必要である。身体的苦痛が緩和してくれれば、その人らしい生き方ができるように援助する。しかし最善を尽くしつづけても、治療と処置ができなくなってくる。その時、"being"そばにいることができる。その人にしかない物語に寄り添う、その姿勢がぬくもりを生み出す。大嶋院長は、患者に笑顔が生まれるように、その人らしく生きられるように、その人が大切にしてきたものを尊重し、チームで支える。吐血してしまう患者には、赤いブランケットでその患者のからだをくるみ、最期の息をひきとるまで、彼のそばに寄り添う。それがぬくもりのあるホスピス・ケアである。(36)

ホスピス・緩和ケアの具体的目標について、大嶋医師はこう記している。(37)

哲学者の先生から「人間は過去の自分があって、そこから繋がる未来を想定することで、今を仮定している」と教えていただいたことがあります。近未来に目標があれば、「今」に意味があるはずです。でも、自分は死んでしまうから、未来が無いとなったら、「今」さえその意味を失ってしまいます。それは、ご家族もいっしょです。愛する人が死んでしまうのに、何にもできることがない。だったら今の苦しい時間は、何のためなのだと思うでしょう。だからこそ、私たちのほうで患者さんのニーズを汲み取り、患者さん・ご家族と一緒に、近未来に目標点を作ることができたら、ご家族にも「今」の意味が出てきます。

このように患者のニーズが何かを病棟チームでくみ取ることが重要である。近未来にその人の目標を作ることで、患者も家族も今を生きる意味を見出すことができるのである。具体的に、大嶋医師は、ある女性患者からもらった言葉を、ホスピス・緩和ケアの基本姿勢にしている。(38)

娘さんは、途中から涙を流していました。そして、できることはたくさんある、と伝えました。毎日顔を見せること、笑顔を見せること、涙を見せること、学校の話をすること、お父さんの手を握ってあげること、でもお父さんの時間はわずかしか無いから、話したいこと・してあげたいことは、来週でいいと考えずに、必ず今週していこう、と説明しました。あなたにしかできないことがたくさんある、と伝えました。

あそかビハーラ病院では、患者の望む食事をできるだけもてなす。手料理のラーメン、ズワイガニ、たこ焼き、季節を感じる鮎、鱧、鰻。なかでも、たこ焼きは流動食にも近い食事となり、患者によってはおいしくて懐かしい食べ物になる。大嶋院長は自ら、患者たちに新鮮なお刺身をもてなしたこともある。

管理栄養士の細見陽子は、こう教えてくれた。

緩和ケアにおける管理栄養士の目標は、「食べることに意味を与える」ことである。患者は、病気のために今まで好きだった食べ物が食べられなくなる悲しみに直面する。理論ではない。その人に何が一番大切なのか。その日にどうすることが大切なのかを考えて、食事を準備する。努力を忘れないようにする。

「食べることに意味を与える」ことが管理栄養士の目標であり、患者の願いでもある。細見管理栄養士は、こう記している。

「食」の形とは決してひとつだけではなく、それぞれが歩んでこられた人生そのものでもあるかも知れません。病棟内にあるファミリーキッチンは、そのような「食べることへの思いに寄り添う」ことを通して、ひとときの「あたりまえ」と「安らぎ」をともに持つことができる場所です。(39)

この病院では、プラスティック容器を使用せずに、陶磁器の食器を活用している。家庭のぬくもりを感じられるからである。

緩和ケア看護課長の吉田厚子は、こう教えてくれた。

あそかビハーラ病院は独立型ホスピスであり、二八床の病院である。緩和ケアの看護は、最後までその人が自分らしく生き抜けるようにするためである。人としての尊厳を保持しながら、患者が少しでも自己実現できるように看護することをめざす。では、患者が自分らしく生きられるとはどういう意味なのか。それは、クオリティ・オブ・ライフ（Quality of Life 生活の質）を尊重することであり、その人がそ

れまで大切にしてきた生活を守ることである。がん患者は、亡くなる前に、急速に自分で自分のことができなくなる。坂を転げるようにADL（Activities of Daily Living）「日常生活動作」が低下する。一人で日常生活ができなくなり、人の支えが必要となる。患者の生活を維持するために、①患者および家族の苦痛を緩和し、②療養生活の質を高め、③医療チームが協働する。「こんな身体だったら死んだ方がまし」と患者が不安を打ち明ける。だからこそ、最期の残された時間を予測して、患者の苦痛を最小限にできるように、カンファレンスで話し合い、プランを立ててケアしていく。患者にとっての最後の目標は、排泄は自分でしたい。歩きたい。散歩がしたい。空気が吸いたい。家に帰りたい。思い出を作りたい。食べたい。たばこやお酒を楽しみたい。おしゃれをしたい。大切な人、家族と過ごしたい。苦しい思いをせずに、眠るように亡くなりたい。看取るものは、こうした患者の気持ちを理解する。緩和ケアの看護師に求められるものは、①誠実、ありのままの相手と自己を見つめる誠実、②感性、相手の痛みを感じ、継続的にまわりが配慮する、③忍耐、相手に時間を与え、相手の成長を信じる、④謙虚、⑤愛である。死にゆく患者とその家族のケアに焦点をあてて、人生を完成する時期になるように援助したい。特に、あそかビハーラ病院には三名の常駐僧侶もいる。ひとは苦しみの中にある時、大きな存在に迎えられる。常駐僧侶の存在は、死を超えてつづくぬくもりと安心を感じられる。看護師ら医療チームもそのお手伝いをさせていただきたい。

患者がその人らしく生きられるように援助するとは、その人のそれまで過ごしてきた大切な日常生活が存続するように支援し、その人の大切にしている心の支えを守ることである。患者にとって今まで過ごしてきたように生きられる時間が限られているから、その患者と家族の残された時間の人生設計を誤らないように支援する。先延ばしにしない。それが緩和ケアの姿勢である。また、僧籍をもった東承子看護師は、人間同士の関係を大切にして育むことについて、こう記している。

苦悩や悲しみがない人生が幸せではなく、そこに意味を見出せた時、味わい深い人生が開け、私が生まれて来たことの意味に出会えるのではないでしょうか。患者さんと共に同じ方向を向いていける、そんな人としてありたい。…中略…大切にしていることは、どんなに辛く苦しい人生であっても、人生最後に私が私であって良かった、生まれてきて良かったと思える瞬間があれば、と願いながら患者さんとともに過ごさせていただくことです。(40)

苦悩や悲しみに意味を見出せた時に、新たな人生が開けてくる。患者が、私が私であって良かった、生まれてきて良かったと思える瞬間があ

るようにと願いながら過ごす。そこに心の底から感じられるぬくもりが感じられる。しかも死で終わりではなく、生と死を超えて、限りなきいのちとなってはたらきづづける。亡き人から受けた愛情や亡き人にささげた愛情を、残された家族や医療スタッフが大切に受けとめる時、その人の愛情が亡き後もはたらきつづける。

看護師の新堀いづみは、「思い出は過去ではなく、今を生きる糧である」という言葉を紹介し、患者と家族に「ぬくもりとおかげさま」という幸せを感じられるようなケアをめざしている。彼女は写真療法家でもある。からだが思うように動かない患者でも、シャッターを押すわずかな力があれば、写真を撮ることができる。ある日、患者がきれいな虹を発見した。そのそばで、彼女は、患者と同じ方向に目を向けてシャッターを押した。その写真には空にかかる幻想的な虹が写っていた。その写真はそのまま、一緒にいた患者がその時、虹を発見し、うれしかった気持ちも写しだされているようだった。写真を通して、患者が誰かと一緒にその時の喜びやぬくもりを分かち合える。新堀看護師は、こう記している。

患者さん、ご家族が快適に過ごしてくださる時間を創りたい。そのために私たちは家にいる感覚に近いように、看護師も白衣を着ていません。…中略…シスターたちが奔走した昔、「病」ではなく「人」と向き合う時に必要とされたのは、宗教でした。そこへ医療が加わり、現代ではさまざまな関わりが可能となりました。治療の終わりが人生の終わりではなく、自分を大切にしながら最期の時まで生ききっていただきたい。仏教を基盤とした当院が、アイルランドのホスピスのように、百年を超えて、未来の患者さんに繋がる今を、精一杯、務めていきたいと思います。(41)

あそかビハーラ病院の特質は、常駐僧侶のビハーラ僧が三名配置され、宗教的な穏やかさが感じられるチーム医療を担っていることである。花岡尚樹ビハーラ僧は、あそかビハーラ病院ビハーラ僧として、二〇一〇年から患者と家族に対して病棟スタッフとともにチームケアにあたっている。患者にとって心の支えとなるのは、主に家族や医師、看護師である。当初は、僧侶が病院に来ると、「何かあったの?」と尋ねられることがあったという。患者に「まだ世話になるのは早い」と告げられたこともあった。(42) 花岡ビハーラ僧は、自分自身の無力さを知り、医療スタッフと共に、患者のためにどのようなことができるか悩んだ。花岡ビハーラ僧は、「僧侶として大切にしていること」について、こう記している。

患者さんやご家族と接する際に、僧侶としてまず大切にしていることは、その方の歩んでこられた人生に耳を傾けること、どこで生まれて、どのようなご両親に育てられたのか。幼少期や学生時代はどのように過ごされていたのか。どのようなお仕事に就かれ、そこでの役割はどうであったか。また、どのように家庭を築かれ、ご家族との関係はどうであったか。何を趣味にされていたのか。食べ物の嗜好は何か。ご病気をされたとき、それをどのように受けとめられたのか、家族の支えは十分か、家族に伝えたいことは何か。やり残したことはないか、人生で何を支えにされてきたのか。信仰をもっているのか、など。…中略…僧侶が大切にしていることを患者さんに伝えるのではなく、患者さんが大切にしていることを僧侶も大切にしていく姿勢で患者さんと接します。(43)

また、花岡ビハーラ僧は、病院にいる僧侶の意味をこう明かしている。

たとえ僧侶であっても、死の前には無力な存在であって、実際に患者さんやご家族の前では、今まで僧侶として学んできた知識や経験が、まったく活かせないことに多くぶち当たります。死の問題にこそ僧侶だから何か答えることができると思うと、それは大間違いです。…中略…大切なことは、僧侶も死の前には無力な存在であり、自らも教えを聞かせていただいている立場であることを忘れてはなりません。患者さんも、そしてこの私も、ともに阿弥陀さまから願われている存在であること、その御同朋の精神こそがビハーラ活動の特徴であり、阿弥陀さまという縦軸との関係をもたせていただくことが、僧侶の大切な意味です。ボランティア活動ではどうしても横軸のつながりがメインとなり、ケアする側とケアされる側という横軸の中で上下関係が生じます。しかし、阿弥陀さまという縦軸を持たせていただくことで、ケアする側もケアされる側も、ともに阿弥陀さまから願われている存在であり、横軸の中での上下はうまれてこないところに、僧侶であることの大切な視点が含まれていると思います。そして、僧侶は阿弥陀さまの教えを聞かせていただく身として、死を滅びとしてではなく、お浄土に参らせていただくという死生観を持ち合わせています。死に直面した患者さんのベッドサイドに座るとき、阿弥陀さまから「お浄土へ生まれさせるから、絶対に大丈夫、安心しておくれ」と願われていることに裏打ちされて、寄り添うことができます。…中略…医療現場での僧侶は、浄土真宗の教えを直ちに説く立場ではありません。しかし、ともに阿弥陀さまから願われている存在であることを確信し、教えをいただく身としてぶれることなく、かつ患者さんの死への不安にも一緒に揺れることのできる、「竹のような存在」が、僧侶であることの大きな意味であります。…中略…死の前には無力な存在でありますが、阿弥陀さまの教えに生かされる身を患者さんのもとに置きつ

つ、患者さんの「生」と「死」をつなぐ懸け橋として、また、医療者と患者さんの隙間を埋められる、そのような僧侶の存在が医療の現場では求められています。[44]

花岡ビハーラ僧が大事にしている言葉がある。

過去を変えることはできないが、意味を変えることはできる。人は事実で生きているのではない。意味をもって生きているのだ。[45]

これは花岡ビハーラ僧が、梯實圓師から教えていただいた言葉である。死に直面した時、「自分が生きてきた意味は何だったのか」という自分の人生そのものに対して問いかけざるをえなくなる。思い通りにならない苦しみを誰しも抱えている。過去はどれだけ悔いても変えられない。しかし、その悲しい過去の意味を変えることはできる。こうして花岡ビハーラ僧は、

どれだけ生きたかではなく、どう生きたかを大切にしたい。

という姿勢が生まれた。それほどまでに相手の目になり、相手の気持ちを察して、その人がそれまで大切にしてきたものを僧侶の自分自身も大切にしようとしている。

このように緩和ケアにおけるビハーラ僧の役割は、その人のかけがえのない人生の物語を尊重し、共に意味を感得することにある。さらに、花岡ビハーラ僧が大切にしている言葉がある。

悲しみは悲しみを知る悲しみに救われ、涙は涙にそそがれる涙にたすけらる。

これは、金子大榮著『意訳　歎異抄』に書かれている言葉である。花岡ビハーラ僧はこの言葉を心の鑑にしている。一緒に泣いてくれた人が一番うれしい。そういう経験が彼自身にもあったからである。筆者は、この言葉に心動かされ、金子大榮の『意訳　歎異抄』のそのページを開いた。すると、そこには次の文章がつづいていた。

五劫思惟の願とは、この悲しみを表はし、その涙から現はれしものであった。[46]

悲しい時にその自分の悲しみを知ってくれる人に救われ、そばで一緒に泣いてくれる人に助けられて、生きる力を取り戻すことができる。それとともに、この金子大榮の文章は、もう一つの意味を示していた。果てしない過去から、仏はあなたの悲しみを知り、涙を流しながら必ず救うと願ってきた。仏があなたを救わんとする願いはあなたの悲しみを知る仏の悲しみそのものである。五劫思惟の弥陀如来の願いは、あなたと

共に悲しむ仏の涙から現れたのである。患者の悲しみも、それをそばで聞いている僧侶の悲しみも、大いなる弥陀の慈悲に包まれている。先の言葉は、『歎異抄』後序の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」の文を金子大榮が意訳した文章である。

患者の生命を思い通りに助けることはできないし、その人の思いをすべて大切にしてくみ取ることもむずかしい。だからこそ無力さを自覚して、大悲にいだかれたからだを相手の所にもっていく。相手も自分も共に仏に願われたいのちであることを胸に刻み、相手の所におもむく。それがビハーラ僧の姿勢であるといえるだろう。花岡ビハーラ僧は、肩に椅子をかけて、患者と散歩に出かける。患者が疲れたら、どこでも座れるようにという思いからである。ビハーラの原意「散歩して気晴らしをすること」と花岡ビハーラ僧の姿勢はそのまま重なっている。

あそかビハーラ病院には、ビハーラホールという阿弥陀如来を安置した仏間がある。悶々とした気持ちのままで仏様と相談できる空間である。あそかビハーラ病院では、患者が亡くなった後、ビハーラホールでお別れ会をする。亡くなった方のまわりに、家族も医師、看護師、病棟スタッフ、ビハーラ僧が集い、その方の人生をふりかえり、献杯する。涙の中で楽しかった思い出を思い起こし、笑顔がうまれることもある。緩和ケアと仏教の融合をめざす、ビハーラ活動の理想がここに示されている。

大嶋健三郎院長は、あそかビハーラ病院が目指す方向として三つを掲げている。[47]

（1）医療と仏教が融合した緩和ケア
（2）医療臨床における僧侶の研修の場
（3）地域における緩和ケアの拠点

患者が歩んでこられた人生、患者が大切にしてこられた日常を尊重する。患者が最後まで生きるそのひと時にあたり、精一杯のケアにあたる。そのために緩和ケアの医療知識ももった僧侶と医療者がチームを組んで緩和ケアをめざす。死に逝く人への接し方を臨床と理論の研修で学ぶ。チームの一員としての役割を医療者も宗教者も学ぶ。臨床に加え、地域の住民のための緩和ケアレクチャーを開催し、病院への見学も受け入れる。

さらに、大嶋院長は、こう記している。

これまで数多くの患者と出会い、たくさんのものを患者からいただいてきた。その方々は、もうこの世にいらっしゃらない。いただいたものを返しきれないまま逝去されていかれた。では、どのようにしたらよいのだろうか？「次にまた出会う、苦しみを抱えた患者の、その苦しみを癒すこと」が、お返しをする代わりになるのではないだろうか。[48]

したがってビハーラとは、人を孤独のなかに置き去りにしないように、医療・社会福祉・仏教のさまざまな専門職が協力して行う活動、またその施設を意味する。患者の全人的な痛みを和らげて、家族とも相談しながら、患者がその人らしく生を完遂できるように援助する。そして患者も家族も医療スタッフもビハーラ僧も大いなる仏の慈しみに包まれているというやわらかい雰囲気が、あそかビハーラ病院内に醸し出されている。すべてのいのちは阿弥陀如来の光に照らし護られている。「正信念仏偈」に「一切群生蒙光照」「摂取心光常照護」（『聖典全書』二巻六〇頁、）と説かれる通りである。「願われたいのち」の尊さとは、弱くて愚かな自己が仏に大事にされていることである。

こうしてビハーラ提唱から三十年後、ビハーラ僧の養成研修が二〇一七年から浄土真宗本願寺派でも始まった。全国では、東日本大震災や事故、自殺念慮者や自死遺族の悲しみに寄り添う宗教者の社会貢献と、一九八〇年代からのホスピス・ビハーラ活動が社会に認められ、岡部健医師の提唱により、二〇一二年から臨床宗教師の養成研修が諸大学等で始まった。臨床宗教師とは、医療福祉機関や被災地などの公共空間で、布教・宗教勧誘を目的とせず、人々の苦悩や悲嘆に寄り添い、相手の価値観や人生観を尊重して、生きる力を育む宗教者である。

6　大嶋健三郎医師に学んだスピリチュアルケアの物語

大いなる慈しみにいだかれて、ぬくもりとおかげさまの心で一つひとつのいのちに向き合う物語がある。その物語は、あそかビハーラ病院長・緩和ケア医の大嶋健三郎が、臨床宗教師研修において教えてくれた詩である。それは、大嶋医師が、英国の小児ホスピスの医師から伝え聞いた『若者とヒトデ』という詩である。[49] 私はこの物語を知って感動した。それで、この詩のルーツを調べてみると、原作は、ローレン・アイズリー（一九〇七～一九七七）の *The Star Thrower*, Harcourt Brace, 1978 であった。その物語が、パラフレイズドされて、The Starfish Story となった。英国などでホスピスやパリアティブケアに携わっている医療スタッフが、この物語を心の支えとして患者と家族のケアに当たっている。患者一人ひとりの人生を尊重する緩和ケアは、The Starfish palliative care と呼ばれている。

そこで、原作や原作を言い換えた英文の詩に敬意を表して、日本語に意訳し、物語の最後に新たなシーンを加えて、『星を投げる少女』という物語を書いてみた。

星を投げる少女

昔、自分の作品を書くために、海によく行く賢者がいた。彼は仕事の前に海岸を散歩するのが習慣になっていた。
それは嵐が通り過ぎたある日のことだった。
賢者が海岸を歩いていると、遠くに、海岸で踊っているようにみえる人影を見つけた。
彼が近づいてみると、その人影は少女だった。その少女は踊っているのではなかった。少女は何かを拾って、海にそっと投げ返していた。
賢者は少女に尋ねた。
「こんにちは。あなたはそこで何をしているの。」
少女は、
「ヒトデを海に投げているのです。」
と答えた。
何かどきっとして賢者は尋ねた。
「どうしてヒトデを海に投げるの。」
「太陽が昇ると、潮がひいていきます。
だから、もしヒトデたちを海に返さなかったら、
彼らは死んでしまいます。」
と少女は答えた。

賢者は、

「何マイルも何マイルもずっと海岸はつづいている。数えきれない何万のヒトデが波で浜辺に打ち上げられ、太陽の光で死んでしまう。あなたが一つ二つのヒトデを海に投げ返しても、それは意味のないことだと思うよ。」

と少女に話しかけた。

すると少女は、

「それでも、私の手の中のヒトデにとっては意味のあることなのです。」

と答えた。

そして、少女はまた一つヒトデを拾って海に投げ返した。

賢者は、少女の言葉を聞いて胸がいっぱいになり、恥ずかしくて何も言えなくなった。

しばらくして、賢者は、少女の隣でからだをかがめ、

打ち上げられたヒトデを一つ拾って、海に投げ返した。

少女と賢者は、目と目を合わせ思わず微笑み、海にヒトデをまた一つ投げ返した。

昇っていく朝日に照らされて、少女も、賢者も、海もきらきら輝いた。

そして、海の中では、ヒトデたちも、陽の光を受けて光り輝いていた。

数量で証明される合理性を重視する価値観から見れば、「手の中のヒトデ」を海に投げ返して助けても、多くのヒトデは救えないから無意味かもしれない。しかし、計算など不要な慈しみの心で見れば、「手の中のヒトデ」は、比べられない唯一の尊い命である。「手の中のヒトデ」、それは、不思議にも縁があって出あった患者一人ひとりを象徴する。かけがえのないその患者自身のために、家族縁者、医師、看護師、管理栄養士、臨床宗教師たちがチームを組んで緩和ケアにあたっている。社会福祉施設等の現場でも、ケアチームがかけがえのないその人に寄り添っている。「手の中のヒトデ」を大事に守る姿勢は、「ぬくもりとおかげさまの心」で、その人に寄り添うスピリチュアルケアを体現している。

小　結

以上考察してきたように、ビハーラの原意は、「くつろいでとどまること」、「休息の場所・気晴らしをすること」、「精舎・僧院」、「身心の安らぎ」を意味している。

ビハーラ活動の定義は、次の四つの柱から成り立っていることが明らかになった。

（1）仏教を背景とした医療福祉機関とその全人的ケア…医療福祉機関には、緩和ケア病棟、高齢者福祉施設、児童養護施設、障がい者福祉施設、保育園・デイサービスセンター統合施設などさまざまな施設がある。ビハーラ活動とは、医療と社会福祉と仏教の連携により、悲嘆や苦悩にあえいでいる人を孤独の中に置き去りにせずに、その悲しみを共に悲しみ、その人らしくくつろいで精一杯生きられるように援助することをめざす。

（2）医療福祉と仏教の協力による人材養成教育…命の尊さを守る倫理教育、死生観、救済観教育、グリーフケア教育、仏教看護論、ビハーラ関連施設における人材養成教育、臨床宗教師（ビハーラ僧）養成教育

（3）医療福祉と仏教の融合をめざした研究…ホスピス・緩和ケア研究、スピリチュアルケア・ビハーラ活動論研究、生命倫理研究、世界の死生学、仏教の死生観、浄土教の看取りと救済観研究など

（4）仏教者を主体とした社会活動…災害復興支援、環境保護活動、自殺予防・自死遺族支援など世界の悲しみに寄り添う宗教的実践。仏教の縁起的生命観を機軸とする社会活動

次に、ビハーラ活動の基盤となる仏教精神は次の通りである。

ビハーラ活動は、仏教の縁起的生命観や浄土教の救済観、死生観に基づいている。縁起的生命観は、すべてのものが無常であり、時空を超えて相互に関係し、支えあっていることに気づき、相互に慈しみ、感謝して生きることを教える。しかし実際には、生命が他の生命を奪い、傷つけあっている苦しみの現実をも知る。人間は、それらありのままを自覚することによって、自己中心的な生き方を反省し、あらゆるものへのわけへだてない慈しみをもって生きることが願われる。浄土教の救済観とは、すべてのものが尊卑賢愚を問わず、如来に願われ、摂取されて見捨

てられることがない教えであり、人々に安心、ぬくもり、生きる力を与えてくれる。親鸞の死生観は、生死の苦海に沈むものが、弥陀の弘誓の船に救われて浄土に往生して仏となり、必ず大切な人と会うことができ、浄土からこの世に還って人々を導くと教えている。ビハーラ活動とは、長岡西病院ビハーラ病棟およびあそかビハーラ病院緩和ケア施設の基本理念が示すように、仏教を背景として、仏に願われている「ぬくもり」と生かされて生きる「おかげさま」の心で、支援を求めている人々を孤独の中に置き去りにせずにそばにいて援助し、医療福祉チームで連携してありのままでいられる安らぎの医療を実践する。宗教宗派を超えて協力し、偏見や差別をなくして困難にあえいでいるものを大切にしようと挑みつづける仏教者の社会活動である。また、橘保育園・橘デイサービスセンターの目標が示すように、「感謝、和合、奉仕」の理念は、ビハーラ活動の理念と同じ方向である。

1. 願いに生かされ支えられている自らのいのちの尊さに気づき、豊かな想像性をもった明るく温かな心を養う。（感謝）
2. 世界に開かれた心をもって、他者との関わり合いのなかで創造的に自己を実現していこうとする主体性を養う。（和合）
3. 基本的生活習慣を身につけるとともに自ら心身を整え、すすんで人のことを考えて生きようとする意欲を養う。（奉仕）[50]

感謝・和合・奉仕は、仏教精神に基づくビハーラ活動の理念と大切な姿勢を見事に表わしている。あたかも一人の人格を一面だけで定義できないように、ビハーラ活動は特定の活動内容に限定できない。なぜならビハーラは、仏の願いにぬくめられ、大切な人々に支えられている自己が、人々の苦悩や悲嘆に向き合い、心の平安と世界の安穏をめざして、悩みながら努力する仏教者の社会実践すべてだからである。ビハーラ活動は、仏の大智と大悲に照護されて、さまざまな障壁を超え、創意工夫して、かけがえのないいのちを護り育む実践である。

人はひとりで生きているのではない。他の誰かに生かされている。数限りない命を受け継いで、今の私がある。命への慈しみは、自分が誰かを愛し支え、自己が人々の愛や自然の多くの命に支えられていることを知る時にあふれてくる。しかし現実には、事故や災害で命が奪われることがある。思いもかけない病気に苦しみ、日常生活を過ごせなくなることもある。その悲しみははかりしれない。また抑圧され傷つけられることもある。だから命を守るためにできることを精一杯行っていく。愛別の悲しみや苦しみをかかえた弱く小さな人間を、いつでもどこにいても、仏は見守っている。消えそうな自己をつつみ支えている。限りない仏の大悲にいだかれ、自分を理解してくれる人に支えられ、無力ではありながらも、精一杯一人ひとりの悲嘆と苦悩に向き合い、その人の想いを尊重して、その解決を共に目指し努力する。それがビハーラ活動である。

註

（1）参与観察については、倫理的配慮を行い、病院・社会福祉施設の管理者・専門職スタッフの了解を得ている。また引用している言葉についても校閲をいただいた。本稿に際し、開示すべきCOI関係にある病院、社会福祉施設、企業はない。

（2）谷山洋三「ビハーラとは何か?応用仏教学の視点から」、『パーリ学仏教文化学』一九号、三三～四一頁、二〇〇五年

（3）馬場祐康（あそかビハーラクリニック元院長）「いのちを考える―救急、がん医療そして緩和ケアの現場を通じて」七三頁、月江教昭（あそかビハーラクリニック元緩和ケア医）「ホスピス・緩和ケアとは」九三頁、『生死を超える絆　親鸞思想とビハーラ活動』所収、方丈堂出版、二〇一二年。吾勝常行「ビハーラにおける仏教カウンセリングの役割」九四～九五頁、友久久雄編『ビハーラ活動入門　生老病死に寄り添うために』、本願寺出版社、二〇一七年

（4）田宮仁『「ビハーラ」の提唱と展開』四頁、淑徳大学総合福祉学部研究叢書二五、二〇〇七年、田宮仁「仏教とターミナル・ケアの方法論」二二六頁、水谷幸正編『仏教とターミナルケア』所収、法蔵館、一九九六年。また、田代俊孝（同朋大学教授・真宗学）も、「死と生を考える会」（ビハーラ研究会）に、一九八〇年代から取り組んでいる。田代俊孝『親鸞の生と死　デス・エデュケーションの立場から』i～ii頁、法蔵館、二〇〇四年

（5）田宮仁「仏教を背景としたホスピス／ビハーラ（Vihāra）の開設を願って」五六頁、ライフサイエンス一三巻一号、一九八六年

（6）中村元「ビハーラ活動の源流」一～二頁、浄土真宗本願寺派ビハーラ実践活動研究会編『ビハーラ活動　仏教と医療と福祉のチームワーク』、本願寺出版社、一九九三年

（7）田宮仁、前掲論文五五頁

（8）田宮仁『「ビハーラ」の提唱と展開』八～一八頁、学文社、二〇〇七年

（9）浄土真宗本願寺派社会部『ビハーラ活動の理念と方向性』一九八六年策定、一九九七年第二版、筆者はビハーラ活動十年総括を踏まえ、ビハーラ活動推進委員会委員長として、『ビハーラ活動の理念と方向性』を起草し、諸委員の意見をまとめて執筆した、その経緯は次の論に紹介されている、篁俊男「新しいビハーラの五つの方向性について」一頁、浄土真宗本願寺派『宗報』、一九九七年四月

（10）打本弘祐「親鸞浄土教におけるスピリチュアルケア理論構築に向けて―ビハーラを手がかりとして」九七～九九頁、桃山学院大学社会学論集四七巻一号、二〇一三年。打本弘祐「ビハーラの展開と〈ビハーラ僧〉」二〇二頁、世界仏教文化研究センター応用研究部門『二〇一六年度研究活動報告書』二〇一七年

（11）打本弘祐、前掲論文「ビハーラの展開とビハーラ僧」二〇二頁

（12）打本弘祐、前掲論文二〇三頁、ビハーラ僧のモデル検討について、本論で詳しく述べられている。

（13）田宮仁『「ビハーラ」の提唱と展開』六頁、学文社、二〇〇七年

（14）前掲書一九頁

（15）田宮仁「仏教の理念にたったターミナルケア／ビハーラ」一一九～一二〇頁。現代のエスプリ二七四号、一九八六年

（16）森田敬史「ビハーラ僧の実際」二七頁、関西学院大学『人間福祉学研究』三巻一号、二〇一〇年

（17）森田敬史「遺族による仏堂の活用実態とその宗教的意義」、『仏教看護・ビハーラ』九号、二〇一四年

（18）ビハーラ花の里病院、「医療法人微風会の概要と沿革」のホーム

ページ参照、https://mifukai.jp/gaiyou.html　二〇一九年五月十三日閲覧

(19) ビハーラ花の里病院、「ごあいさつ」参照、https://mifukai.jp/v_greeting.html　二〇一九年五月十三日閲覧

(20) 「広島・県北仏婦ビハーラの会の藤井睦代の面接調査・ビハーラ花の里病院訪問調査」、和泉慧雲師に面談して施設案内いただいた。

(21) 内山晴香「真宗者におけるビハーラ活動の一考察」五〇頁、『実践真宗学研究科紀要』六号、二〇一八年。「仏教婦人会を主体とした「ビハーラ」の実践の一事例として、広島県三次市で二十六年に渡って継続されている「広島・県北仏婦ビハーラの会」の活動を取り上げた。毎週水曜日、オリエンテーションと奉仕活動と法話会にて構成されるビハーラ実践は、仏教婦人会会員、地域寺院の僧侶、病院に勤務する僧侶の協働によって行われた。仏教婦人会会員が行うビハーラ実践では、「ビハーラ」とは、してあげる活動ではなく「させていただく」活動であり、活動者自身も「ビハーラ」をいただく身であるという一貫した姿勢が貫かれた。自己限界を知らされつつ、その中で他者と協働する。ビハーラ花の里の実践で行われている「広島・県北仏婦ビハーラの会」の活動並びに、ビハーラ花の里病院で行われている実践からは、専門職としての「ビハーラ僧」という立場にこだわるのではなく、僧侶と門信徒がそれぞれの立場から協働して実践を行うビハーラ活動の一つのモデルを見ることができる」と論じられている。

(22) 「広島・県北仏婦ビハーラの会およびビハーラ山口ヒアリング調査」、広島・県北仏婦ビハーラの藤井睦代元代表、ビハーラ山口の中村博元代表の「ビハーラ活動記録ノート」を、本人、家族に教えていただいた。

(23) 『社会福祉法人ビハーラ光輪会　橘保育園・橘デイサービスセンター便覧』参照、二〇一九年

(24) 『社会福祉法人光輪会について』、「施設および事業」、http://www.tachibana-korin.com/korin/　二〇一八年六月三十日閲覧

(25) 『社会福祉法人光輪会便覧』、「施設運営の基本精神」「法人および施設の沿革」一～九頁、二〇一八年七月一日

(26) 『平成二十二年度卒園記念論集　培其根』一〇六頁、社会福祉法人光輪会橘保育園、二〇一〇年

(27) 『平成二十八年度卒園記念論集　培其根』一〇三～一〇六頁、社会福祉法人光輪会橘保育園、二〇一七年

(28) 『光輪会だより』、「配食サービスたちばな」、二〇一八年七月二四日

(29) 『光輪会だより』、「配食サービスたちばな」、二〇一四年一月一日

(30) 『光輪会だより』、「橘デイサービスセンター」二〇一八年

(31) 『平成三十年度卒園記念論集　培其根』九四頁、社会福祉法人光輪会橘保育園、二〇一九年

(32) 『独立型緩和ケア病棟　あそかビハーラ病院　特別養護老人ホーム　ビハーラ本願寺　十年の歩み』二三頁、本願寺出版、二〇一九年、あそかビハーラ病院緩和ケア病棟パンフレットとホームページに、基本理念と基本方針が記されている。http://www.asokavihara.jp/seturitu.html　二〇一九年五月六日閲覧

(33) 大嶋健三郎「ホスピス・緩和ケア」、井村裕夫編『医と人間』一七五頁、岩波新書、二〇一五年

(34) 大嶋健三郎「緩和ケアの目標」、『龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター二〇一四年度報告書』、二〇一五年

(35) Cicely Saunders, “Care for the dying 1: The Problem of Euthanasia”,

Nursing Times 72(26), pp.1003-1005, 1976

(36) 大嶋健三郎「ホスピス・緩和ケア」一八二頁

(37) 前掲書一九〇頁

(38) 大嶋健三郎「ホスピス・緩和ケアにチームの力を」、あそかビハーラ病院編『お坊さんのいる病院　あそかビハーラ病院の緩和ケア』一四頁、自照社、二〇一七年

(39) 細見陽子「食べることに寄り添う～あたりまえのことを求めて～」、前掲書四六頁

(40) 東承子「僧籍をもつ看護師として」、前掲書四〇頁

(41) 新堀いづみ「最期まで生きる病院」、前掲書十頁

(42) 花岡尚樹「医療現場における僧侶の役割」三七頁、『ビハーラ入門　生老病死に寄り添うために』所収、本願寺出版、二〇一八年

(43) 花岡尚樹「「生」と「死」をつなぐ懸け橋に」、あそかビハーラ病院編『お坊さんのいる病院』六六頁

(44) 花岡尚樹、前掲書六八～七一頁

(45) 花岡尚樹「医療現場における僧侶の役割」三五頁、『ビハーラ入門』所収

(46) 金子大榮『意訳　歎異抄』九八頁、全人社、一九四九年

(47) 大嶋健三郎『独立型緩和ケア病棟　あそかビハーラ病院　特別養護老人ホーム　ビハーラ本願寺　十年の歩み』参照、本願寺出版、二〇一九年

(48) 大嶋健三郎「出会いから別れまで携わらせていただく、その思い」八一頁、『死の臨床』七三号、二〇一九年

(49) 大嶋健三郎「緩和ケアと仏教の融合」、『龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター二〇一三年度報告書』一三頁

(50) 弘中信厚『社会福祉法人光輪会　橘保育園・橘デイサービスセンター便覧』参照、二〇一九年

※医療福祉機関における主な研究協力者　田宮仁（ビハーラ提唱者・長岡西病院ビハーラ病棟）、森田敬史（長岡西病院ビハーラ病棟元ビハーラ僧・龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）、和泉慧雲（ビハーラ花の里病院創設者）、弘中信厚（社会福祉法人光輪会 橘保育園・橘デイサービスセンター長）、陶山久美子（橘保育園主任保育士）、宇都宮幸美（橘デイサービスセンター主任、介護福祉士）、前屋敷悦子（ビハーラ橘ヘルパー派遣センター主任）、大嶋健三郎（あそかビハーラ病院院長・緩和ケア医）、花岡尚樹（あそかビハーラ病院ビハーラ室長・認定臨床宗教師）、吉田厚子（あそかビハーラ病院・看護課長）、細見陽子（あそかビハーラ病院・管理栄養士）